

ほなひ歴史通信

第112号

2024(令和6).9.1

想いを乗せてく水郡線全線開通九十周年

赤津康明

大子町に関する鉄道の歴史を振り返る時、今からおよそ百年前、大正十一年(一九二二)の四月十一日に鉄道省(現在の国土交通省)によって公布された改正鉄道敷設法がある。

それは、全国で新たに約一万キロに及ぶ一四九路線を整備するという壮大な計画であり、その中の第三六号には、大子に関する次のような記述がある。

「栃木県茂木ヨリ烏山ヲ経テ茨城県大子ニ至ル鉄道及栃木県大桶附近ヨリ分岐シテ黒磯ニ至ル鉄道」

つまり、大子から栃木方面へ向け、東北本線や烏山線、真岡線(現在の真岡鐵道)へと鉄道を延伸する計画があったのである。その効果について解説した『鉄道敷設法予定線路説明』(大正九年発行)によれば「茂木、烏山、馬頭、大子はいずれも地方物資の集散地であり、本線路の敷設は宇都宮を中心として物資の需給を円滑にすることになり、大いに産業の発展に貢献するだろう」とされており、その実現には、地域の大きな期待が寄せられていた。

しかしその後、第二次世界大戦などの諸事情により、計画されていた新規路線の多くが着工されない「予定線」となり、大子と栃木県を結ぶ鉄道建設も幻に終わってしまったのである。

それから約十年後となる昭和九年(一九三四)、水郡線は地元住民の強い要望と数多くの関係者の懸命の努力が実を結び、水戸から大子を経て郡山へと続く路線として全線開通した。この間の経緯は、過去の本通信での野内正美氏、大金祐介氏、神長敏氏による玉稿などに詳しいが、まさに長年の悲願達成の瞬間であった。

その後の水郡線は、地域住民の移動手段として、また奥久慈を訪れる観光客の足として、走り続けている。令和元年東日本台風では、久慈川に架かる鉄橋が流出するという甚大な被害を受けたが、多くの人々の尽力により予定より早く再開することができ、今日に至っている。

先日、早曉のJR常陸大子駅周辺を散策した折、午前五時台の水戸行き始発列車に乗車する学生達の姿を見ながら、JR東日本の社歌『明け行く空に』の一節が思い浮かんだ。

明け行く空に響く笛の音は 今を出発(たびだ)つみんなの想い
風に乘れ君よ 君は雲に乘れ 目指す理想は大きな未来

本年十二月四日に、水郡線は全線開通から九十周年の記念すべき日を迎える。これまでどれだけの人々が、日々の生活のなかで、また未来への旅立ちの起点として、それぞれの駅を利用したことだろう。鉄道が町を走る有り難さと水郡線の歴史を想う時、その大切さを改めて実感する。

地域社会が、人口減少などの様々な課題に直面しているなか、大子町にとって、そして茨城県北地域の未来にとっても、水郡線は欠かせない存在である。これを次の世代につないでいくためにも、ここに水郡線全線開通九十周年を祝うとともに、路線存続への強い想いを新たにしたい。

(大子町副町長)

編集人

大子町歴史資料調査研究会

齋藤 典生（大子町歴史資料調査研究員）

藤井 達也（大子町歴史資料調査研究員）

大金 祐介（大子町歴史資料調査研究員）

神長 敏（大子町教育委員会事務局）

大金 真理子（大子町教育委員会事務局）

発行

大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

☎ 0295（72）1148

発行日

二〇二四年（令和六）九月一日